

CURES Salon

興味深いカナダ社会

海野八尋

カナダの政治経済状況については多くの日本人があまり関心を持っていない。カナダへの移住と開拓の歴史は浅く、先住民の歴史文化を除けばたいして見るべき歴史的文化的遺産はない。何か買物といっても一口に言って日本人が欲しいものはほとんどない。

しかし、一転して調べなければ判らないカナダ社会に注目すれば、それが極めて興味深い研究・調査対象であることが判る。長い不況で失業率が平均で11%に達した（人口換算で日本の700万人に相当）。物乞い、残飯捜し、よっぱらい、フードバンク（食品支給のネットワーク。多くのボランティアが参加）や教会の給食の長い行列。日本では見慣れない風景である。長期不況と加米自由貿易協定以後低い労働条件を狙っての対米企業転出の為に経済状況はかなり深刻なものになっている。ある近代経済学者は、大恐慌時より悪いのではないか、と私に語った。保守・革新を問わず、対米対抗上日本との関係強化を強く志向している。

厳しい自然状況、広い国土、少ない人口、アメリカとの対抗と従属。アジアを含む移民の国。ケベック州で多数を占めるフランス系カナダ人の存在。組織率40%という強力な労働運動。イギリスから入った社会主義思想の強い影響。これらは近年のカナダの在り方を大いに規定している。移住カナダ人の出身国の文化・伝統の尊重。先住民の権利拡大（現在日本の4倍の面積の自治地域の設定）。アジア系移民・政治的難民の受入れ。ケベック州の特殊な自治要求の受入れ。あるカナディアンは、たとえ違うグループであっても助け合わざるを得ない、と言っていた。つまり少ない人口で国家・社会を維持し、かつアメリカの圧力に対抗していく為に社会的には一種

の妥協が必要になり、この寛容と妥協のシステムがアメリカよりはるかに民主主義的な社会関係を作りだしてきたといえる。他方、国際的には積極的多角的外交、国連尊重の姿勢がカナダの国際的地位を極めて高いものにした（当地のカナディアンはアメリカ人と共に国家としてのアメリカがあんまり好きではない：”We don't take care for American”という言い方をする。支持率では多数派の野党の議員が三月の連邦議会で首相に向かい、「カナダの主権を売渡したアメリカの狗」と非難していた）。

また近年の労働運動とラディカルな学者の社会的影響力はアメリカ（労組組織率15%、労働者政党なし。ラディカルはいるが非現実的勢力）とは比較にならないくらい大きい。労働運動以外の諸運動（人種差別反対、フェミニズム、先住民権利擁護、環境保護、生協、加米自由貿易協定廃棄、途上国民衆運動支援、同性愛者権利擁護、児童の虐待阻止、地域起こし等々）も活発で、いま諸運動の連帯が大きな課題として自覚されている。広範な分野の社会学者（含NDP所属）が、戦略・政策論、理論分析を驚くほど活発に展開している。複雑な社会状況であるから、単純な資本労働分析では済まない。グラムシが高く評価されていること、研究者が政党から独立して議論していること、政策論なしの現状分析がないことが特に目立つ。彼等の日本の社会・政治・経済と社会運動、社会科学に対する関心は大変強い。日本と共通する事情、普遍的性格を持つ理論研究の成果を見るに今後日本の社会科学研究者が彼等と交流する必要があるにあらう。（1992年4月22日、在モントリオール）

（金沢大学経済学部教授）